日本 GIF オンラインセミナー
「神々の島バリの多文化共生：インドネシア国内移民との共存の物語」
実施報告書（概要版）

公益財団法人日本グローバル・インフラストラクチャー研究財団

セミナー開催概要

- 主 催：公益財団法人日本グローバル・インフラストラクチャー研究財団（日本 GIF）
- 日 時：2024年11月28日（木）14:00～15:30
- 開催形式：Zoom を利用したオンライン形式（ウェビナー）
- 講演者：岩原 紘伊氏（聖心女子大学現代教養学部人間関係学科 専任講師）
- 司会者：坂本 晶子（日本 GIF 事務局長）

開催の趣旨

「神々の島」として知られるバリ島は観光業が盛んで、経済的に発展した地域である。バリ島は独自のヒンドゥー教を中心とした宗教や文化を持ち、その特異性から、住民には「バリ人」としての強いアイデンティティが形成されている。

バリ島では、1990年代以降、観光産業が急成長した。インドネシア政府は、国内の経済格差を解消するため、ジャワ島などの人口過剰地域から他の地域への移住を歴史的に奨励してきたが、観光産業の発展は、バリ島への他の地域からの国内移民を引き寄せることとなった。その数は、現在まで増加の一途をたどっている。バリ島では、民族的多数派であり独自の宗教的儀礼や村落共同体制度（バンジャール）を持つバリ人と移民との間に摩擦が生じることもある一方で、これまでの歴史からは、バリ人の持つ寛容さと相互扶助の精神、そして移住者側の適応努力により、両者の間の共存の知恵を見出すことができる。

日本 GIF は、気候変動適応策としてのインフラ建設に関心を持っている。現在、気候変動に伴う自然災害や環境の悪化によって住む場所を追われる人々が増加している中、受け皿となる新たなインフラの整備は重要である。バリ島への国内移住は気候変動起因ではないが、異なる文化背景を持つ人々が長い歴史の中でどのように共に暮らし、対立を避けながら今の社会を築いてきたのか、その成功例と課題を学ぶことは、気候変動適応インフラの建設とその将来を検討するために重要である。

今回のオンラインセミナーでは、聖心女子大学現代教養学部人間関係学科の岩原紘伊先生をお招きし、バリ島における経済移民の歴史とその背景、文化共生のプロセス、そして現代における状況についてわかりやすく解説していただいた。

講演要旨

バリ島はバリ州に属し、人口は約 400 万人（2024 年現在、一時滞在者を含まない）で、面積は 5,632 km²と日本の愛媛県ほどの大きさである。主要産業は、観光業、農業、建設業で、1970 年頃は農林水産業が中心だったが、観光業の発展により産業構造が逆転した。2019 年

の国際観光客数は 620 万人に達し、国内観光客も 1,000 万人に及ぶ。地域社会は特徴的な構成を持ち、村 (desa) には慣習村 (desa adat) と行政村 (desa dinas) がある。1 つの行政村に複数の慣習村が含まれる場合もある。慣習村や、その下に位置する慣習集落 (banjar adat) は、住民の生活や帰属意識の中心であり、「慣習 (adat)」が規範として広く機能している。

「バリ人」とは、「バリ語を母語とし、ヒンドゥー教を信仰する人々」を指し、これはバリ人としての認識において重要な要素である。公用語のインドネシア語のほか、バリ島では地方語としてバリ語が用いられる。国全体ではイスラーム教が多数派だが、バリ州では人口の 83% がヒンドゥー教徒であり (2010 年)、バリ・ヒンドゥーは土着化した独自の信仰を持つ。バリ人という意識はオランダ植民地時代に形成され、独立後に制度化された。バリ・ヒンドゥーは、少数派のバリ・ムロ (バリ・アガ) と、ジャワ・ヒンドゥー、特にマジャパヒト王国の末裔を指す多数派に分かれる。

バリでは 9 世紀頃から王国が形成され、18~19 世紀に 9 つの小王国が分立し、現在の行政区画に対応している。バリで生まれ、バリで暮らしてきたイスラーム教徒の「ニヤマ・スラム」は、バリの王国から正式に土地を付与され居住してきた歴史を持ち、カンブンと呼ばれる地域共同体に住む。ニヤマ・スラムとして、ジャワ人 (クルンクン県に集住)、ブギス人 (ブレレン県に集住)、ササク人 (カランガサム県に集住) が挙げられる。

バリ観光は 1920 年代のオランダ植民地時代に始まり、1980 年代のマスツーリズム開発を経て発展した。それに伴い、1990 年代後半以降、他島からバリ島への移住者が急増した。特にイスラーム教徒の移住者 (プンダタン / pendatang) が都市部で急増し、宗教構成の変化によりバリ・ヒンドゥーの人々はアイデンティティの強化を図った。この背景には 1998 年のスハルト政権崩壊の影響もある。また、観光開発は環境問題にも影響を及ぼし、2000 年代以降は持続可能な観光が注目され始めた。World Silent Day (ニユピ / Nyepi = ヒンドゥー教の新年を祝う日で、「静寂の日」とも呼ばれる) というキャンペーンで宗教を超えた環境 NGO の活動が進み、バリ生まれの非バリ人や他島出身者も含めて良好な関係を築いている。

バリ島の都市部では異なる宗教や民族の混住が「当たり前」化し、共生が日常化している。また、2017 年の法律では「Toleransi (寛容)」が国民文化を発展させる原則の 1 つに位置づけられた。イスラーム教徒とヒンドゥー教徒は互いの祝祭日に食べ物を分け合う伝統 (ゲジョット / ngejot) を通じて共生関係を強調している。近年ではニヤマ・スラムに注目し、バリ人やバリに新たに移住してきた人々に対して、多民族混住の歴史や共生関係の築き方を伝える試みが進んでいる。互いに顔を合わせる人間関係の中で、バリ・ヒンドゥーとイスラーム教徒がどのような共生関係を模索し、築こうとしているのかを理解していくことが重要である。

アンケート・感想

参加者に対し、セミナー終了時にアンケートを表示し回答を依頼した。セミナーを知った経緯、セミナーの中で特に関心を持ったセクション、感想、要望等、貴重な意見を得た。

以上